

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月20日現在

機関番号：25502

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16692

研究課題名(和文)小津久足の文事 近世後期における紀行・詠歌・蔵書・小説受容の考察

研究課題名(英文)Literary practice of Ozu Hisatari

研究代表者

菱岡 憲司(Hishioka, Kenji)

山口県立大学・国際文化学部・准教授

研究者番号：10548720

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：江戸時代後期の裕福な商人、小津久足(1804-1858)を対象として、文事という視点で、文学・文化にまつわる様々な営為の考察を行った。具体的には、紀行文執筆、詠歌、蔵書、小説評論について研究を行い、それぞれの営みが、当時において一流のものであること、またいずれもが有機的に連携していることを明らかにした。その成果を『小津久足の文事』(ペリカン社)『小津久足資料集』(雅俗の会)としてまとめて発刊した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

松坂商人である小津久足を研究対象に据えてその代表的な4つの文事を考察したことにより、江戸時代の商人が、非常に豊かな文学的・文化的営みを行っていたことを明らかにした。これにより、江戸時代後期における、具体的な文化の発信者/享受者の姿、その伝播形態、執筆者における写本/刊本に対する意識の違いなど、現在行われている文学・文化的営みとの共通点・相違点を浮き彫りにし、日本文化の継承と変遷を考察する具体的な足がかりを示すこととなった。

研究成果の概要(英文)：I studied various works related to literature and culture from the viewpoint of literary practice, targeting the wealthy merchant Ozu hisatari (1804-1858) in the late Edo period. Specifically, I researched his travel writing, poetry, book collection, and critiques of novels, and discovered that his activities were considered first class at that time, and that all were organically linked. The results were published in "Ozu Hisatari no Bunbunji" (Perikansha) and "Ozu Hisatari documents" (gazoku-no-kai).

研究分野：日本近世文学

キーワード：小津久足 文事 紀行 詠歌 蔵書 小説受容

## 1. 研究開始当初の背景

近代的な文学概念の成立していない江戸時代においては、対象を狭義の文学にかぎると、多くの価値ある存在を見過ごすことになる。そこで文学ではなく文事という視座をすえ、人間の諸々の文学的・文化的営為に価値を見出し、考究することを本研究は試みた。対象とするのは、伊勢松阪の豪商小津久足の文事である。一般には、馬琴とその作品に対する評答をやりとりした知友、小津桂窓(けいそう)として、また古今の稀書を蒐集した西荘文庫の主として著名である。ただ、このような理解のされ方自体が、馬琴小説に価値を見出し、その作品解釈の一助として、久足を研究するという従属的な姿勢をあらわしている。西荘文庫にしても、狭義の文学作品を多く所蔵していたことに重きを置くという、やはり近代的な文学概念にしばられた理解を脱してはいない。つまり、馬琴作品の理解者という従属的な視点を廃し、小津久足その人を中心に据え、文事という概念でその文学的・文化的営為をとらえることで、江戸時代後期の实情に即した文化状況をあきらかにする必要があった。

## 2. 研究の目的

江戸時代後期の裕福な商人、小津久足(おづひさたり 1804-1858)を対象として、文学ではなく文事という視座で、文学・文化にまつわる様々な営為の考察を行う。紀行文執筆、詠歌と歌会運営、蔵書・蔵幅、小説の批評および創作への影響など、いずれの文学的・文化的営為においても質・量ともに当代一流の足跡を残した小津久足の文事を対象とすることで、ただ小津久足だけではなく、最終的には近世後期における紀行・詠歌・蔵書・小説受容のあり方を考察する。

## 3. 研究の方法

小津久足の文事に、紀行・詠歌・蔵書・小説受容の4つの柱を見出し、それぞれについて具体的な達成目標を設け、口頭発表・論文執筆・翻刻紹介と、研究実績として残るかたちで成果を公にした。また4つの柱を研究する過程において、文事にまつわる他の注目すべき事柄が見出された場合、書誌調査・資料撮影・カードの作成等、基礎作業を行った。最終的には、過去の研究論文とあわせて、『小津久足の文事』として研究書を発刊した。また貴重な文献等を図版・翻刻で紹介する資料集『小津久足資料集』も発刊し、研究成果を広く社会に発信した。

また、小津久足関連資料を多く所蔵するのは、日本大学総合学術情報センター・天理図書館・本居宣長記念館・石水博物館・小津家であり、それぞれ所蔵資料が膨大なため、研究期間を通じて調査を行い、書誌調査・画像撮影・テキスト分析・翻刻等の作業を行った。

## 4. 研究成果

小津久足の文事を解明するため、文事の四つの柱とした紀行・詠歌・蔵書・小説受容において、それぞれ研究を行なった。

紀行については、『難波日記』と『陸奥日記』の翻刻を行った。とくに『陸奥日記』は、東北大学を中心とした歴史学の研究者とともに、陸奥日記研究会を立ち上げその成果として『小津久足 陸奥日記』(佐藤大介・高橋陽一・菱岡憲司・青柳周一共編、東北文化資料

叢書 11) を刊行し、翻刻と解説を担当した。これは、東日本大震災の被災地となった地域を、小津久足が旅をし、詳細な紀行文を書き記していることから、往事の姿を知る貴重な記録として、刊行が望まれたものである。人文学研究者が、その専門性を活かして、地域と社会に貢献するものとなった。他に、『小津久足紀行集(三)(四)』(高倉一紀・菱岡憲司・龍泉寺由佳共編、神道研究叢刊 14) も刊行した。

詠歌については、久足の歌論『桂窓一家言』の解題・翻刻を「翻刻・小津久足『桂窓一家言』」として発表し、『桂窓一家言』を分析した論文「小津久足の歌がたり」も発表した。

蔵書については、小津家所蔵の西荘文庫目録の解説をすすめ、天理図書館所蔵の同目録との関係を考察した。また、『小津久足資料集』に蔵書目録の翻刻を収録した。

小説受容においては、馬琴評答集における桂窓評を検証して、「馬琴評答集の再検討」(『日本文学研究ジャーナル』7号) を発表した。

最終的に、上記の四つの文事における研究成果を、一般に利用・参照可能にするべく、論文集『小津久足の文事』(ペリかん社)、資料集『小津久足資料集』としてそれぞれまとめた。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計 10 件)

1. 「翻刻・小津久足「桂窓一家言」(上)」『雅俗』(14) 50-67 2015年7月
2. 「本居宣長記念館所蔵・小津桂窓宛書簡(二)」『有明工業高等専門学校紀要』(51) 54-52 2015年10月
3. 「小津久足『難波日記』について・付翻刻(上)」『文献探究』(54) 15-30 2016年3月
4. 「翻刻・小津久足「桂窓一家言」(下)」『雅俗』(15) 53-63 2016年7月
5. 「小津久足の歌がたり:『桂窓一家言』に即して」『国語国文』85(8) 34-48 2016年8月
6. 「本居宣長記念館所蔵・小津桂窓宛書簡(三)」『有明工業高等専門学校紀要』(52) 62-64 2016年10月
7. 「小津久足『難波日記』について・付翻刻(下)」『文献探究』(55) 5-20 2017年3月
8. 「本居宣長記念館所蔵・小津桂窓宛書簡(四)」『国際文化学部紀要』(24) 43-46 2018年2月
9. 「石水博物館所蔵・小津久足(桂窓)関連書簡について」『鈴屋学会』(34) 55-58 2018年12月
10. 「馬琴評答集の再検討」『日本文学研究ジャーナル』(7) 91-104 2018年9月

### 〔学会発表〕(計 3 件)

1. 「小津久足の紀行文」鈴屋学会 2017年4月16日 本居宣長記念館
2. 「小津久足と本居大平 大平添削への反駁」近世中後期上方文壇における人的交流と文芸生成の場」公開研究会 2018年3月3日 大阪大学豊中キャンパス
3. 「小津久足思想形成」北陸古典研究会 2018年3月10日 金沢大学サテライト・プラザ

### 〔図書〕(計 5 件)

1. 『小津久足の文事』ペリかん社 2016年11月

2. 『小津久足紀行集(三)』高倉一紀・菱岡憲司・龍泉寺由佳編 皇學館大学研究開発推進センター神道研究所 2017年3月
3. 『小津久足 陸奥日記』佐藤大介・高橋陽一・菱岡憲司・青柳周一編 東北大学大学院文学研究科東北文化研究室 2018年3月
4. 『小津久足資料集』菱岡憲司・村上義明・吉田宰編 雅俗の会 2019年3月
5. 『小津久足紀行集(四)』高倉一紀・菱岡憲司・龍泉寺由佳編 皇學館大学研究開発推進センター神道研究所 2019年3月

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)  
なし

取得状況(計0件)  
なし

〔その他〕  
なし

6. 研究組織

(1)研究分担者  
なし

(2)研究協力者  
なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。